

## 論文審査の結果の要旨

令和元年 7 月 22 日

申請者： 唐 暁煜

論文題目： 持続可能性日本語教育の実践研究

－中国の大学日本語教育における中上級専門科目の可能性－

申請者は、中国の大学における中上級の日本語専門科目を「言語生態学」の理論に基づく「持続可能性日本語教育」として実践し、その過程を、受講生がテキストの内容からいかに生態学的意味を生成していくか、教員が従来の「教える者」ではなく「同行者」という役割をどのように果たしたかという 2 つの視点から研究した。

その研究で、申請者は理論の理解と教室での実践の双方を着実に行ったことがうかがえた。申請者は、岡崎敏雄と岡崎眸の文献を参照しつつ、言語生態学の理論について述べ、その後、中国のある大学における読解の授業での実践を考察した。その中では、雇用やグローバル化という現代の課題に関するテキストを教材にし、受講生の議論やロールレタリングを記録した。そして、そこに現れた受講生の意味生成のプロセスを一つ一つ検討し、受講生が、外国で起きたできごとを自分の現実から遊離した「情報」ではなく自分の生きる世界と関連づけたものとして捉える言語活動が生じ、言語生態学的なダイナミックな過程が見いだされた。この点で、執筆者は自分の目的に合った授業を実践することができたと評価できる。また、執筆者は、伝統的な教師像すなわち「教授者」から持続可能性日本語教育における「同行者」としての役割を果たすに至ったことが明らかになった。このように言語機能の理論から実践へと繋げた申請者は、評価すべき成果を得たと考えられる。

口述試験は、令和元年 7 月 19 日（金）東金キャンパスで実施した。口述試験で申請者は、自分の研究を簡潔明快に示すことができ、質問にも適切に答えられた。教材の選び方や学生の談話の分析について質問が出たが、申請者が分析方法を十分に身につけた上で考察したことがわかった。また、日本語を学ぶだけの日本語の授業から脱却する可能性を考察した点と学生の議論を活性化する役割を果たしていた点は評価された。ただし、学生が教材の内容をもっとよく理解できるようにしてもよかったのではないかという指摘や、研究内容の提示の方法に努力の余地があったことが指摘された。

以上の理由で、論文審査委員会では学位請求論文の審査に合格したと判断した。

審査員（主査）： 人文科学研究科 吉田 朋彦

審査員（副査）： 人文科学研究科 岡崎 眸

審査員（副査）： 人文科学研究科 林 千賀

審査員（副査）： 大連理工大学 杜 鳳剛